

独居高齢者の「危機管理」に関する概念と近年の文献の動向

工藤 禎子

抄録：独居高齢者の生活の支援のあり方を検討する一資料として、独居高齢者の危機と危機管理とは何かを明らかにするために、関連理論や近年の文献を概観した。わが国で「危機（リスク）」とよんでいる内容は、「クライシス（突然起こる惨事）」と「リスク（ダメージの可能性、損失の原因、危険な状態などの多義）」の両者をさすと考えられた。近年の文献では、高齢者が独居であることが疾病や困難のリスク、また、独居高齢者は専門職による危機管理の対象ととらえる視点の報告がほとんどであった。独居高齢者自身が認識している危機や、行っている危機管理に関する報告は限られ、今後の研究の必要性が示唆された。

1. 緒言

我が国における独居高齢者は、国勢調査によると、65歳以上人口に占める割合が、平成7年は12.1%、12年は13.8%、17年は15.1%、22年は16.4%と上昇を続け、独居高齢者数は約500万人にのぼる（総務省統計局、2012）。

独居の高齢者に関して、罹病率や死亡率などの健康指標は独居者以外の人と差がないという知見（Davis et al. 1992）や、独居者のほうが不健康である（Kharicha et al. 2007）という両方の結果が散見される。

独居高齢者は、QOLや生活満足感は独居者以外よりも高いが、危機・緊急時のサポートが課題であるという報告もみられる（Ieffe et al. 1992）。しかし、独居高齢者の危機や緊急とは何か、またその対策であるところの危機管理についても現在のところ、我が国で十分に明らかにされているとはいえない。

そこで、今後も増加する独居高齢者の、危機へのサポートのあり方を検討するために、（1）危機、及び危機管理に関する理論や指針から「独居高齢者における危機と危機管理」の概念を検討し、（2）独居高齢者と「危機管理」に関する近年のわが国の研究や解説を概観することを目的とする。

2. 独居高齢者における危機と危機管理

1) 独居高齢者における危機

北海道医療大学 看護福祉学部 地域保健看護学講座

通常、保健医療福祉分野で「危機」とよばれる概念は、「クライシス（危機・事故）」と「リスク（ダメージを生じさせる可能性）」が混在していると考えられる。

（1）クライシスとしての危機

クライシスは、キャプラン（Caplan, G.）によると、「人生の重要な目標に向かうとき、障害に直面し、一時的、習慣的な問題解決を用いてもそれを克服できないときに発生する状態」であるといわれる。危機理論においては、危機には2種類あり、表1のように、「発達段階に係る危機」と「状況的な危機」があり、さらに「状況的な危機」は、「社会的な危機」と「偶発的（アクシデント）な危機」に分けられるという。この危機の種類に従うと、独居高齢者の「発達段階に係る危機」は、「老年期」における老化から来る心身機能と生活機能の低下、加齢に伴い発症しやすい疾病、それによる入院や入所、死と考えられる。

また、予期し得ない「状況的な危機」の「社会的危機」には、重要他者の死、孤立、経済的困難が含まれ、「偶発的危機」は他の世代と同様と思われる自然災害や事件が主であると考えられる。

地域保健看護分野においては、クライシスの解釈は広がっており、かつては、クライシスは主に災害を指していたが、現在は、突然起こる惨事として、自然災害、経済的問題、公害等を含む環境問題を含む。地域保健看護分野において、個人のクライシスを扱う場合には、クライシスを「個人と環境の均衡を破壊する出来事」であり「クライシスは問題解決方法の失敗の結果」とも言われている（荒木田、2004）。

クライシスは、はじめはメンタルヘルス分野において

表1 危機理論による危機の種類と独居高齢者の危機

危機の種類	危機の概要	危機の例	独居高齢者における危機
発達段階に関係する危機 Maturational or developmental crises	発達、成熟に伴う人生の特定の時期で発生する予測し得る特有の危機的状況	エリクソンの人間的な生涯発達に関する8つの段階各期に見られる発達の危機	・老化→心身機能と生活機能の低下 ・疾病の発生→入院、入所 ・死
状況的な危機 Situational crises	予期し得ない出来事によって身体的、心理社会的に安定した状態を脅かすもの		・重要他者の死 ・孤立
社会的危機 Social crisis		失業、離婚、別離など	・干渉 ・経済的困難 ・引越
偶発的危機 Accidental crisis		火災、地震、暴動など	・火災、地震、暴動 ・犯罪への巻き込まれ

表2 クライシスの段階と反応

	Pre-crisis 危機前	Crisis 危機	Post-crisis 危機後
期間 Duration	年～秒	秒～時間	時間～月
認識 Perception	無意識、絶対ない	明確、曇った、おちこみ	次第に現実と直面する
情緒的反応 Emotional Resonse	「私には起こらない」	「何で私に」 「酷いことが私に！」	「はい、私に」 「OKになるだろう」
認知力 Cognitive ability	クライアントの標準	状況を理解することができない	効果的な再構成の組織化
行動 Behavior	クライアントの標準	無感覚、不安、無力、 圧倒される、失見当、 対処不能、戦い、または 飛躍	不安軽減、楽観化、 見当の再獲得、目的的、 支配可能、安定的な努力

Community health nursing から工藤訳

研究、実践されていたが、現在は、危機理論が、多様なヘルスケア分野に影響を及ぼしているといえる。

クライシスは出来事ではなく、出来事に対する個人の認識と捉えられ、同じ事象でも個人による受け止めによってその事象が危機か否かが分かれるといえる。

地域看護学の研究者であるSpradley (1996) は、クライシスの段階を、表2のように、Pre-crisis (危機前)、Crisis (危機)、Post-crisis (危機後) に分類し、クライシスに対する、人々の認識、情緒的反応、認知、行動を整理している。地域の看護職は、危機理論とともに、危機に対する人々の反応を理解して、支援システム構築や直接的な支援に望むべきであることを述べている。

(2) リスクとしての危機：独居高齢者のリスク

近年、様々な領域の「リスク」に関する解説で引用されている国土交通省による「社会資本整備におけるリスクに関する研究 (大谷、安達, 2001)」では、「リスクという言葉は様々な使われ方をしており、少なくとも

- ①損失の可能性
- ②損失のチャンス (または確率)
- ③損失の原因 (ペリル)
- ④危険な状態 (ハザード)
- ⑤損失や危険にさらされている財産または人
- ⑥潜在的損失
- ⑦実際の損失と予想した損失の変動
- ⑧不確実性

という異なった意味を持っている」としている。「リスク」の各分野にわたった共通の定義はなく、実はあいまいな言葉である。

近年の地域看護学の教育用テキストにおいては、健康危機管理に関連して「リスク」の概念が扱われている。リスクは、人(々)の健康や生命を脅かすものであり、主に、人間の故意・過失によるもの、自然災害によるもの、感染症などによるものに分類され、「リスク=障害(事故)の重大さ×障害(事故)の発生確率」と説明されている(荒木田, 2004)。リスクは、アセスメントに

より判定され、予防、管理される対象として、政策決定者や専門家が関与する視点から取り扱われていることが多い。

これに対して、独居高齢者のリスクに関しては、高齢者本人を対象とした調査は少ないが、質的記述的研究による報告 (Porter, 1994) がみられる。Porterによると、在宅の独居の高齢女性における、独居という生活経験の構成要素は、

(1) making aloneness acceptable

1人を受け入れること

(2) going my own way 自分自身の方法でいくこと

(3) reducing my risks リスクを減らすこと

(4) sustaining myself 自分を保持すること

の4つであるという。そして、独居の高齢の女性達は「リスク」を忍び寄るものととらえ、具体的には

(1) losing one's balance and falling

バランスを崩したり転倒すること

(2) not being found 見つけられないこと

(3) doing too much 無理しすぎる

(4) you never know 何が起るかわからないこと

の4つであると述べている。Porterは、また、詳細な記述と分析から、独居高齢者が他者から様々な干渉を受け、それが「自分自身の方法でいくこと」を脅かすリスクであると述べている。また、転倒が、入院、入所、死の引き金になることから、重大な結果につながる出来事をリスクと考察している。すなわち、独居高齢者のリスクとは、「重大で悲劇的な結末につながる恐れのある出来事であり、社会的につくられ、日々の生活の中で起こりうること」と定義がされている。

危機を示す2つの用語である「クライシス」「リスク」の共通点は、(1) 人々の生活、生命の安定、安寧を乱すものであること、(2) ある出来事がクライシスやリスクかどうかは個人の状況や主観によるものであると言いついて、これらは、独居高齢者の場合においても共通すると考えられた。

「クライシス」と「リスク」という2つの用語の違いは、「クライシス」は「障害に直面し、一時的、習慣的な問題解決を用いてもそれを克服できないときに発生する状態」という定義が多領域のほぼ共通した理解になっているが、「リスク」はより多様に使われ、危険な状態の原因、危険な状態、危険が起こる可能性などの広範な内容を含んでいる。独居高齢者の生活における危機をとらえる場合は、Porterの研究にみられるような、現在の生活の継続や価値観を脅かすような、徐々に進む老化や将来の惨事の予測など、長期的な将来のリスクと、他者からの干渉という社会的な相互作用によるリスクの視点は重要であると思われる。

2) 独居高齢者における危機管理

(1) 危機管理という概念

危機管理という語は、政治や経済、中でも軍事や金融、環境問題、災害対策分野などにおいて多様に用いられている。

災害対策分野における危機管理は「あらゆる種類の災害、事故、犯罪などによって、大量の人命や財産、社会的信用や安定が失われる恐れがある場合に、政府や自治体、企業等の組織が通常業務を超えてとる、事前事後の緊急対策 (下線、筆者)(大谷、安達、2001)」を指す。

保健医療分野では、厚生労働省健康危機管理基本指針(2001)、地域健康危機管理ガイドライン(2001)が示され、「健康危機管理とは、医薬品、食中毒、感染症、飲料水、その他何らかの原因により生じる国民の生命、健康の安全を脅かす事態に対して行われる健康被害の発生予防、被大防止、治療などに関する業務であって、厚生労働省の所管に属するものをいう (下線、筆者)」。

社会福祉学においては、「危機管理とは、ある特定の危機状況を放置すれば、確実に既存のシステムが破局に向かうことを『予防』すること、もしくは『臨時体制』を一時的に採用して短期間に既存のシステムを回復することを目的とする (下線、筆者)(高澤、1997)」と言われている。

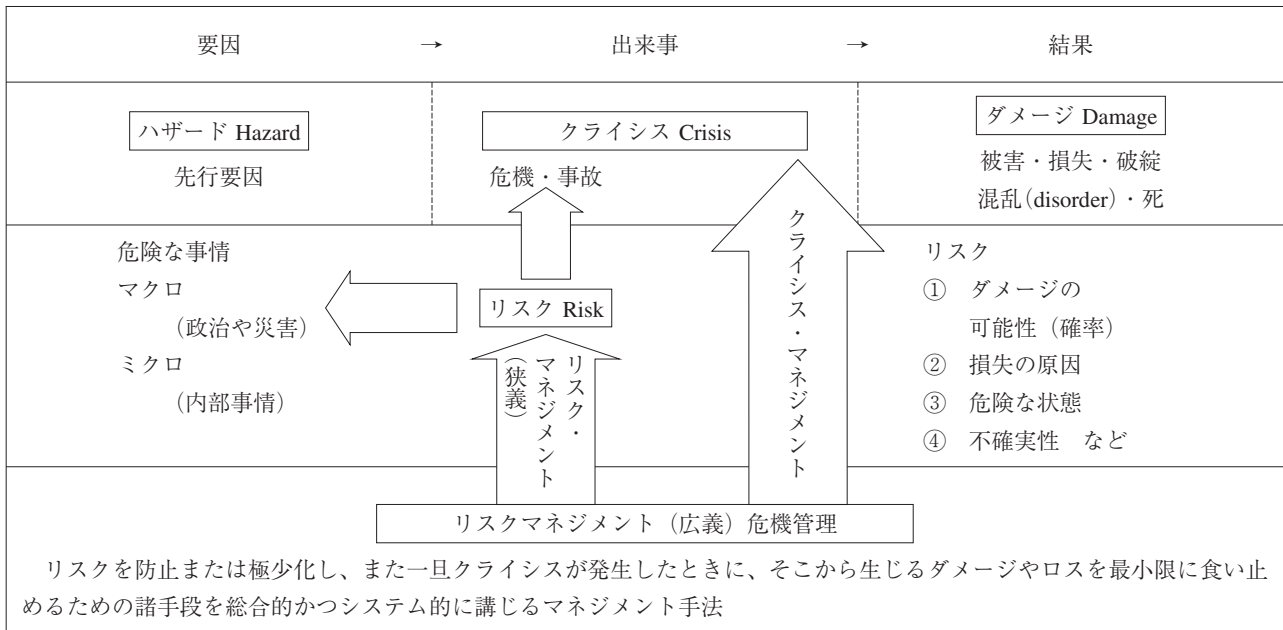
分野は異なっても、各専門分野の定義にみられるような、損失や被害の起こりうる状況や可能性(上記の下線)を対象とし、予防から事後の対応の全ての段階の対応(上記の二重下線)を含む総合的なマネジメントが含まれている。

「危機」のとらえ方と同様に、日本語で「危機管理」という場合の概念は広範であり、クライシスマネジメント(Crisis management)とリスクマネジメント(Risk management)の2つの概念が混同したまま用いられている。

クライシスマネジメントは、危機事態の発生後の対処方法に関することが中心であり、一方、リスク・マネジメントは、危機事態の発生を予防するためのリスクを防止または極小化し、一旦クライシスが発生したときに、そこから生じるダメージやロスを最小限に食い止めるための諸手段を総合的かつシステム的に講じるマネジメント手法の分析方法等を含む広い概念といえる。

これを整理してみたのが図1である。リスクという語の多義性をふまえて「リスク・マネジメント」には、広義と狭義があると考えられることができる。つまり「クライシスを起こす可能性としてのリスク」への対応を狭義のリスク・マネジメント、この狭義のリスク・マネジメントと「クライシスそのものへの対応」を合わせたものが広義のリスク・マネジメントという考えである。

図1 危機（クライシス、リスク）と危機管理



災害対策や危機管理理論を元に工藤が作成 (2012)

大谷・安達 (2001) は「個人や組織が何をリスクとしているかは各個人、各組織によって異なるが、それらの主体が捉えたリスクをその主体の目的に従って、適切に処理し、対応する手法がリスク・マネジメント」であると述べている。リスクやクライシスのとらえ方と同様に、リスク・マネジメントも主体の認識と目的によって異なる固有な方法といつてよいであろう。

(2) 独居高齢者と危機管理

—文献からみた「独居」高齢者と「危機管理」に関する文献の概要—

独居高齢者のそれぞれが、何を危機としているか、どんなことが危機管理として行われているかを明らかにするために、文献検索によって、近年のわが国の研究や解説で、独居高齢者の「危機」「危機管理」について検討した。オンラインの医中誌で、キーワード「独居」and「危機管理」を投入したところ、計13件がヒットした。

キーワード検索なので、独居高齢者の危機管理をテーマとした報告だけではなく、対象者の一部に独居者が含まれているのみの文献も含む。13件のうち、原著は4件であり、残りの9件は解説/特集であった。

それぞれの文献におけるテーマ・内容から、独居・独居者の扱いをみたのが、表3である。

独居という語は、ソーシャルワークや精神看護分野における退院困難のリスク要因、医学や公衆衛生学領域の、疾病（骨折等）や認知症の狭義のリスク要因や入院の一要因として扱われていた。また、独居高齢者という存在は、介護福祉分野における安全管理の対象者、看護

学における災害時要援護者や退院支援の対象としてとらえられていた。つまり、これまでの文献では、専門職は、高齢者が独居である場合に、何らかの悪化の要因（リスク）としてとらえ、管理すべきものとして、危機管理という概念で取り扱ってきたものと思われた。独居高齢者自身が、自分のクライシスやリスクを認識しているか、またそれらの危機に対して危機管理の意識や行動があるかについての報告は極めて少ないといえる。近年、独居者に関して「無縁社会」「孤独死」の予防の視点から、複数の事例や事業の報告がみられるが、孤立や孤独は、緊急に起こる事態ではないため、今回の検索では見あたらず「危機管理」という概念とは異なる文脈で扱われていると考えられた。

独居の高齢者自身がどのように危機管理をしているかを検討した一研究では、Porter (1994) は独居の高齢女性が、リスクを減らすための彼女たちの意図的な行動として、

- (1) exercising caution 注意を働かせること
- (2) negotiating reliance 信頼を取り交わすこと
- (3) bringing my world closer to home

自分の世界を自分の至近にもってこることであることを明らかにした。専門職や組織が行う危機管理のみならず、独居高齢者自身が、注意深く行動することで危機を回避していることも、本人なりの重要な危機管理ととらえられた。人々や回りの物と、自分との関係において、安全を信頼できるような関係を取り交わし、また色々な制約を受け入れ、自分の世界を自分の至近に持つてくるような生活における危機管理を行っていることは注目に値する。

表3 「独居」と「危機管理」をキーワードに検索された和文献（医中誌による）

種類	領域	著者（年）	テーマ・内容	独居、独居者の扱われ方
解説	介護	藤田講志 (2012)	高齢者の安全管理を考える、1人暮らしを支える工夫、ベッドサイドの安全管理	安全管理の対象としての独居高齢者
		奈良尚 (2012)	高齢者の安全管理を考える、1人暮らしを支える工夫、移動、バリアフリー住宅	
		小林貴代 (2012)	高齢者の安全管理を考える、1人暮らしを支える工夫、排泄介助	
		菊澤薫 (2012)	高齢者の安全管理を考える、1人暮らしを支える工夫、外出	
		和久島耕治 (2010)	リスクマネジメント、現場の悩み、在宅ケア支援システム	
	ソーシャルワーク	太田貴理香 (2009)	退院困難、がん、カンファレンス	退院困難なリスク要因としての独居
	精神看護	鈴木温子 (2007)	認知症高齢者の退院、在宅介護支援サービス	
	医学	朝倉健太郎 (2011)	総合外来、困難事例、糖尿病、アルコール症	疾病のリスク要因としての独居
		三木隆己 (2011)	骨粗鬆症、骨折	
	原著	地域看護	臺有桂 (2011)	健康危機管理演習、独居で障害のある災害時要援護者
精神看護		斎藤澄子 (2008)	独居者の退院前訪問の必要性、危機管理能力への支援、認知症	退院支援の対象としての独居者
公衆衛生		竹田徳則 (2010)	認知症を伴う要介護認定の心理社会的危険因子	認知症のリスク要因としての独居
医学		細井京子 (2009)	認知症透析患者の出血事故、入院理由としての独居	入院理由としての独居

独居高齢者の危機管理に関する認識や内容については、研究で十分に明らかにされているとは言えない状況にあり、わが国の今後の独居高齢者の急増を鑑みると、今後は、高齢者自身が危機管理をどのようにとらえているかに関する研究が必要であると考えられた。

文 献

- 荒木田美香子 (2004)：危機管理，木下由美子編著，エッセンシャル地域看護学，第2版，303-304.
- 朝倉健太郎 (2011)：総合外来困難事例の共有と振り返り，エクストリーム困難事例への挑戦，*Journal of Integrated Medicine*，21巻9号，746-751.
- Eileen Jones Porter. (1994) “Reducing my risk”：A phenomenon of older widows’ lived experience, *Adv Nurs Sci*, 17 (2), 54-65.
- Davis MA, Neuhaus JM, Moritz DJ et al. (1992)：Living Arrangements and survival among middle-aged and older adults in the NHANES I epidemiologic follow-up study, *Am J Public Health*, 82 (3), 401-406.
- 藤田講志 (2012)：高齢者の安全管理を考える，一人暮らしを支える工夫，高齢者の在宅環境整備，ベッド周り・トイレ・食事困難な事例より，*福祉介護機器Technoプラス*，5巻1号，61-64.
- Ileffe S., Tai SS., Haines A., et al. (1992)：Are elderly people living alone an risk group? *BMJ*305：1001-1004.
- Kharicha K, Iliffe S, Harari D. et al. (2007)：Health risk appraisal in older people1：Are older people living alone an “at-risk” group?, *Br J Gen Pract*. 57：271-276.
- 菊澤薫 (2011)：高齢者の安全管理を考える，一人暮らしを支える工夫，どうしても行きたいところ，*福祉介護機器Technoプラス*，4巻1号，59-64.
- 小林貴代 (2011)：高齢者の安全管理を考える，一人暮らしを支える工夫，暮らしの中核をなす排泄ケアの重要性，*福祉介護機器Technoプラス*，4巻11号Page59-62.
- 三木隆己 (2011)：骨粗鬆症Q&A (第35回)，骨粗鬆症の治療薬を選択するうえで、重要なポイントは何ですか?，*骨粗鬆症治療*，10巻2号，165-167.
- 奈良尚 (2011)：高齢者の安全管理を考える，一人暮らし

- しを支える工夫，高齢者の安全管理を考える，福祉介護機器Technoプラス，4巻12号，45-48.
- 齋藤澄子，森川晋，大塚恒子（2008）：退院前訪問の実態調査，日本精神科看護学会誌，51巻3号，184-188.
- 鈴木温子（2007）：高齢者のQOL確保とリスクマネジメントに関する研究，静岡県立大学短期大学部研究紀要，20号，25-33.
- 臺有桂，田高悦子，今松友紀，糸井和佳，河原智江，田口理恵（2011）：地域看護学教育における健康危機管理演習の試み 地域看護診断を基礎にした災害時要援護者への支援，横浜看護学雑誌，4巻1号，34-41.
- 高澤武司（1998）：福祉における危機管理，有斐閣，東京，p3.
- 竹田徳則，近藤克則，平井寛（2010）：地域在住高齢者における認知症を伴う要介護認定の心理社会的危険因子，AGESプロジェクト3年間のコホート研究，日本公衆衛生雑誌，57巻12号，1054-1065.
- 太田貴理香（2009）：【連携場面で遭遇する退院困難事例への支援】退院に困難な要因を抱える患者への支援の実際，地域連携network，2巻4号，32-39.
- 大谷悟・安達豊（2001）社会資本整備におけるリスクに関する研究「国土交通政策研究第4号」（2001年6月 国土交通省国土交通政策研究所）
<http://www.mlit.go.jp/pri/seika/PDF/kkk4.pdf>
- Spradlay（1996）Community Crisis：Prevention and Intervention, Community Health Nursing：Concepts and Practice, 4th ed. (Spradlay B.W., Allender J.A.)
- 多久島耕治（2010）：リスクマネジメント，現場の悩み，在宅の独居高齢者について，介護福祉，79号，114-116.

The Concept Analysis and Review of "Risk management" among elderly people living alone

Yoshiko KUDO

Department of Nursing, Health Sciences University of Hok-
kaido

北海道医療大学看護福祉学部紀要 No.19 2012年